令和元年度　「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　わたしのまちと山　」

滋賀県　近江兄弟社中学校　３年　小椋（おぐら）　友里圭（ゆりか）

2013 年９月 16 日、わたしのまちを台風が襲った。史上初となる大雨特別警報が発令されるほどの異例の事態。「数十年に一度」などという言葉に私は、少し戸惑ったがそれほど危機感もなく、「明日、元通りになっていたらいいな」程度にしか思っていなかった。

翌朝、わたしは窓から見える風景に絶句した。家から見える安養寺山が、崩れていたのだ。あの青々しい緑は、どこにもなかった。わたしはこの日のことをよく覚えている。土砂災害という危険が、こんなにも自分の身近に潜んでいるとは、思ってもみなかったのだ。わたしは安養寺山のふもとに住む友人の安否や、安養寺山のそばにある小学校のことが心配だった。ごく普通に、当たり前に思っていたものを、土砂災害は簡単に奪っていくのだということを知った。

あの日、栗東市では一人の方が亡くなられた。大規模な被害も出た。今なお、あの山は以前のような緑を見せてはくれない。自然はそう簡単には元通りにはならないのだ。あの青々しい緑を見るにも、このまちの土砂災害への対策にも、おそらく長い年月がかかるのだろう。だからといって、それを自然が待ってくれるわけではない。明日の身の安全は約束されていない。だから、わたしは土砂災害とその防止対策を考えてみることにした。

まず、わたしは安養寺山で起きた土砂災害を知るため、安養寺山の立ち入りができる区域に行った。今は整備が完了しているが、何箇所も崩れていて、痛々しい状況だった。次にまた同じような強い台風が来たらと思うと、とても安全とはいえない。

次に、安養寺山のふもとに住む友人にあの日のことを聞いた。どの友人も、避難勧告が出るギリギリまで避難をしなかったと言う。中には、なかなか避難をせずに家にいたが、避難所から家に帰ってみると、家のすぐ後ろまで土砂が流れこんでいて、避難が遅れていたら危なかったかもしれないという話をしてくれた友人もいた。話を聞いていると、大人の避難への意識が低いということが分かった。市からのエリアメールがきても、慌てる人は少ない。そういう油断が、土砂災害における人的被害を招く可能性がある。

これらのことをふまえ、わたしは二つの土砂災害に対する対策を考えた。

一つは、若い人達や大人が率先して避難や日頃の防災訓練に取り組むことだ。安養寺山の土砂災害で亡くなられた方は、ご高齢の方だった。もしかすると、土砂災害への油断が原因かもしれないし、一人では避難が困難だったのかもしれない。高齢化社会が懸念されている今の日本で、これを解決できるのは若い人達だろう。だからこそ、若い人達は世代を超えた地域の絆と、日頃からの防災意識、万全な防災対策が問われる。例えば、「避難準備・高齢者等避難開始」の情報が出たとしよう。本来なら、避難に時間がかかる方がいる家庭が主な対象だ。しかし、変えるべき点はここだ。ご高齢で一人暮らしをする方や、足の不自由な方などを、若い人達が率先して避難の手助けをするのだ。これにより、地域で避難できずにとり残される人はいなくなるだろう。ただ、この仕組みの難点、逆に言えばカギとなるのは若い人達や、大人だ。何不自由なく動くことができる人ほど、避難への意識は低い。それを変えるためにも、日頃の防災訓練などを若い人達や大人に向けて発信しなければならない。この世代を超えた地域の絆と若い人達の防災意識が構築する地域の土砂災害対策の仕組みがあれば、あのような犠牲が生まれることを阻止できるはずだ。

もう一つは、自然に寄り添って暮らすということだ。これは長い時間がかかるかもしれないが、わたしたち人間が帰るべき原点でもある。具体的に言えば、山を削ってまで人間の領域をつくるのをやめるということだ。本来、道は大地の地形に沿って敷かれ、人間もそれに従い暮らしていた。今では、大地を削り、切り開き、アスファルトで埋めることで道が敷かれ、人間の居住地も築かれている。それこそがおかしいのだ。わたしはあの崩れた山と、住宅地目前にまで達する土砂を見たとき、どうしてここに住宅地をつくったのか、不思議でならなかった。自然に抗うべきではないのだ。この災害大国日本で暮らしていくには、昔のように、自然とともに寄り添う

暮らしが必要だ。だから、長い時間をかけてでも、昔のような自然と寄り添う暮らしを見つめ直すことが大切だと考える。

自然に立ち向かうのも、寄り添うのも、これからの日本を担う若い人達がカギとなる。わたしも、その一人だ。あなたは、災害の多いこの日本と、どう向き合うのか。自然と人間、その未来を左右するカギを今、わたしたちは握っている。